

SSKW

巣立ちだより



No.
42

— 目 次 —

- ・ 昨年から今年への活動に向けて … 1-2
- ・ 障害者総合福祉推進事業 — 経過報告 … 3-6
- ・ 第11回愛のふれあいコンサート — 予告 — … 6
- ・ メンタルヘルスのリハビリとWRAP … 7
- ・ 第2回ピアスタッフの集いに参加して … 8

昨年から今年への活動に向けて

理事長 田尾有樹子

2014年の新春は穏やかに過ぎていった。昨年は巣立ち会にとってどのような年だったか、特に印象に残った3点を取り上げてみたい。

昨年始めた事業でとても嬉しかったことはリハビリカレッジである。2年、3年前に、ジュリー・レパーさん、ジェフ・シェパードさんを招いての講演会で、リハビリ促進の有効なプログラムとしてリハビリカレッジのお話を伺った。その時、私たちもそれができる機会があればと漠然とした夢を抱いていた。その後、英国で、リハビリカレッジのボランティアをしていたスタッフが入職し、少し現実になるかもしれないという期待が生じた。ただ、その段階では当事者のスタッフがこのプログラムを行うには足りない状態だった。しかし、まるでそ



の為に準備されたかのように、一昨年の秋に、巣立ち会で働きたいという当事者スタッフに出会い、リハビリカレッジ創設へ向けての準備がスタートした。そして、昨年春にリハビリカレッジが開講するに至ったのである。その後も当事者スタッフが増え、日々の活動の中で、様々な矛盾や葛藤を抱えながらも、私達の目指す方向はリハビリであり、そこを中心に据えたこの事業が今後も巣立ち会の支援の中で重要なポジションを占めていくことが期待される。色々な巡り合わせで開始に至ったこの事業を今後は益々発展させていきたいと願っている。

昨年の秋の大きな出来事の一つに、こひつじ舎の移転増員のための建物建設の事があった。昨年7

月、国の内示が下りず、建設計画は白紙かと思われた矢先に、東京都と調布市の話し合いで、国の負担分をもってくれることとなった。この話が白紙に戻ると多くの方に迷惑がかかるというような状況の中、薄氷を踏む思いだった。その後、入札が行われたが、3年前の巣立ち風の時とは状況が変わり、建設業界の人出不足と材料費の高騰で、公的事業の入札は軒並み、不成立に終わっている中の入札であった。これで成立するのかとひやひやものであった。そのような段階を通り過ぎ、今年1月20日に地鎮祭も行い、何とか建設にこぎ着けることが出来た。今までの中で、最も多難なスタートであったような気がする。10月完成予定であるが、それまで平穩に過ぎてほしいと祈るばかりである。

昨年 of 苦い思い出と言え、私の中では精神保健福祉法改正案の成立に向けての出来事がある。

一昨年、「新たな地域精神保健医療体制の構築に向けた検討チーム」第3ラウンドという検討会で、保護者の義務規定について話し合った。この義務規定の中でも最も大きな問題だったのは医療保護入院の保護者同意の問題だった。医療保護入院とは医療上の強制入院で、家族からの情報をもとに入院の是非を判断するとはいえ、入院の前提に家族の同意を要するということがおかしなことである。そのことで、結果的に入退院の判断が家族に任せられることになり、退院したいときは家族が責められたり、或いは入院させたことを恨まれたりという現象が起こる。最も弊害なのは私たちが退院支援をしてる中で、多くの長期の入院の家族が退院に同意しないという事実があることである。数々のケースで連絡を取ることも難しくなっている家族の退院同意を取るためにかなりの労力を必要とすることになる。いずれにせよ家族に精神障害の入院に関して必要以上に負担と権限を与えてしまっている結果である。

この検討会の多くの検討委員たちがほかの保護者の義務規定も含めて撤廃することに賛成だった。検討会の論点整理にもそのような合意で、出されている。しかし、法文化された時には保護者はなくな

ってもよく定義の不明な家族という言葉が残り、医療保護入院の家族の同意規定は残ってしまった。

私は非常に大きく落胆した。あの時、どのような力が働いたのか、措置入院でも指定医2名の診断が必要なのに、医療保護入院が指定医1人で成立してよいものかという議論が本質的なことでは一番大きな問題だった。しかし、日精協の考えとしては民間病院で入院時に指定医2名は無理だという意見だった。それ以外にも保護者の同意がなければ入院費が払われるのかというような心配もあったようだ。今となってはなぜあそこで家族の同意となったのかわからない。昨年の大きな心残りであった。

最後に、昨年暮れには厚労省からの委託事業で全国十数か所、何らかの特徴のある事業を展開している地域の事業所のヒアリング調査を行うこととなった。当初は短時間でそれだけの時間が取れるのかが非常に心配だったが、やってみるとできないことはないということに気付いた。そして、実際に全国の何らかのモデル的な事業を行っている事業所の話の聞ける機会を持てたことは非常に興味深かった。次ページ以降で報告があるが、この経験は巣立ち会自体が今後の事業運営を考えていくことに大きく役に立つ経験だったと思う。これから年度末にかけて報告準備もあり、この事業委託は決して楽な作業ではないが、人は苦勞をすればそれだけ報われることもあるということを実感している。

この経験などをもとに来年度、巣立ち会は地域における精神保健医療福祉の連携による総合的な支援のあり方を検討することになるであろう。

巣立ち会の原点である、利用者のニーズに沿って、そして利用者や支援者自身がリカバリーを促進させていくことが出来るような事業展開に今年もしていきたいと考えている。



障害者総合福祉推進事業 一 経過報告

当会では今年度、厚生労働省「障害者総合福祉推進事業」を受託し、「地域生活中心の支援モデル構築に向けた、全国の地域支援事業の実態調査とシステム構築に向けた調査研究」と題した事業を実施しております。

その事業では、地域生活支援を充実させることで「入院せずに済む」というパラダイムの転換を起こせるようにしていく、そのために必要な地域支援モデルとはどういったものかを調査することを主眼としています。

具体的には、以下2本立てで調査を進めてきました。

- ①質的調査（ヒアリング調査）
- ②量的調査（アンケート調査）

事業の成果については、今年度末に報告集を作成し、厚労省をはじめ調査にご協力頂いた皆様等にお配りします。また、4月以降には当会のHPにもアップして誰でも無料でダウンロードできるようにしますので、ご興味のある方はぜひご覧下さい。

質的調査では、全国から先駆的な好事例を18カ所選定し、10月から12月にかけて当会職員が手分けしてヒアリング調査を実施しました。さながら北海道から沖縄までの「全国縦断ツアー」となりましたが、今回の巣立ち日よりでは、その中から三つの事例をご紹介します。

- （事例-1）埼玉県「NPO法人じりつ」と、沖縄県「NPO法人ふれあいセンター」
- （事例-2）十勝地域ネットワークを訪ねて 「NPO法人 十勝障がい者支援センター」
- （事例-3）北海道日高 「社会福祉法人 浦河べてるの家」

埼玉県「NPO法人じりつ」と、沖縄県「NPO法人ふれあいセンター」

こちらの2法人について。どちらもまさに「先駆的な好事例」と呼ぶにふさわしい所であることは、多くの方が認めるところでしょう（奇しくもふれあいは今年度の精リハ学会「ベストプラクティクス」賞を受賞しています）。ただ、調査が終わってその「先駆的」な要素を振り返ってみると、実はこの2か所はすごく重なる部分が多かった！という発見をしました。

その要素とは

- ①「ピアサポートを基盤にした土壌が、文化の一部として定着している」
- ②「常に地域貢献を念頭に置いていて、地域で価値のあるイベントを続けている」

③「利用者のニーズをくみ取って、事業のバリエーションを増やし続けている」でした。

この3つの要素全てを高いレベルで満たし続けることは、簡単そうに見えるかもしれないけど実はものすごく難しい。巣立ち会には「20年以上にわたって200人以上の退院支援を行ってきた」という看板があって、これは我々が誇るべき成果なわけですが、この3点についてはまだまだ目指す余地があるようです。

加えて、④「カリスマ的リーダーがいる（いた）が、きちんと世代交代が進んでいる」、このことは、今回お話を伺った両法人の職員の方々が、実に良い表情で自分たちの理念や方向性、そして日々の実践

を話されていた姿から、びしびし伝わってきました。うらやましさを感じたという大変ですが、私が逆の立場だったら、はたして同じような表情で「シンフォニー」を語れるだろうか？やっぱり自分の仕事を理解し、プライドを持って他者に説明できる、そんな大人になりたいものだなあ。トップダウンからボトムアップへ。私も頑張ります。

一方、「組織の中での専門家の役割」では両団体は違って、「じりつ」ではPSWが真のプロ的な仕事をしていてさすが！なのですが、「ふれあい」には何とPSWが定着していない！え、じゃあPSWってやっぱり要らない職種なの？など、考えは切り

がなく続きますので、今回の紙面ではこれまで。あとは報告書をご覧ください。

ちなみに、埼玉は日帰りでしたが、沖縄にはその前のリハ学会からの流れで多少の時間があり、一行3人で「つかの間のひと時」を満喫しました。天気も信じられないくらい良くてベリースイートでしたが、最後に「泡盛で撃沈」し、同行のお二人にはご迷惑をかけました。

最後に、お世話になった皆様、本当にありがとうございます。いつかお返しする機会があればと心から思っています。（シンフォニー 長門）

十勝地域ネットワークを訪ねて

年の瀬も押し迫った12月25日、帯広空港に降り立った私たちを出迎えてくださったのは、NPO法人十勝障がい者支援センター理事長門屋氏だった。門屋さんといえば、日本の精神保健福祉業界をけん引し、帯広市に地域ネットワークを構築されてきた方である。その活動範囲の広さゆえ、実際帯広市でどのような活動がおこなわれているのか、具体的に理解していなかった私たちであるが、そのような状況の下、社会資源の見学ツアーをさせていただくこととなった。

まずは市内のグループホームや作業所を見学しつつ、精神科病院、市立図書館を覗いた。売店で目につくのは、地元で採れたと思われる土つきの野菜や市内の作業所で製造されたクッキー、そして帯広ケア・センターが誇るごぼう茶。地域性を感じる。病院の敷地内に、小さなお蕎麦屋さんがあった。昼のみの営業とのことだったが、その店で働く障害をもつ方たちもおられるとのこと。ただの病院内の施設となるのではなく、しっかりと雇用の場を生み出しているところはさすがである。図書館の喫茶スペースを運営していたのも、やはり帯広ケア・センターだった。門屋さんを見つけると、そこで働いている女性が嬉しそうに「ご無



沙汰しています！」と声をかけてこられた。最近この場所で働き始めた旧知のメンバーさんとのこと。外からみただけでは、福祉サービス事業所が運営しているとはわからない立派な喫茶室だった。ピアスタッフとして働く方も1名おられた。

その後、街中を移動しながら次々と各所を案内下さる門屋氏に必死についていながら、私たちが目にしているのは、帯広市の地域ネットワークそのものなのだといふ気が始めた。電信通り商店街を訪れたとき、その思いは更に強くなった。電信通り商店街とは、帯広中心部から15分ほど離れた場所に位置する、長さ約450mの商店街である。多くの地方商店街の例にもれず、こちらもつい最近までシャッター街となっていたそうである。その街おこしに、商店街と福祉サービス事業所がコラボレーションしたものができないか、と門屋氏の発案により商店街実践活動事業を活用し、空き店舗を改修。そこで十勝管内の障がい者施設で生産したクッキーや野菜を販売したり、アンテナショップを立ち上げた。今では商店街振興組合とタッグを組み、地域活性化に一役かっている。商店街のイラストマップの中に、障害福祉サービス事業所が運営するきれいな店舗が4か所も載って

いるのには驚いた。中でも昼はお惣菜販売、夜は居酒屋として営業している「惣菜・ご飯や でんしん」の店長は精神障害をもつ方が雇われているとのこと。ここでも雇用の場を自ら生み出そうとされてきた成果を目の当たりにした。

印象的だったのは、「十勝障がい者支援センター」が位置する市民活動プラザ6中の存在。その名から推察される通り、廃校となった学校の校舎を借り上げ、その中で様々な団体が活動をしている。福祉団体だけでなく、かつての音楽室では帯広交響楽団が演奏することもあるのだとか。こうした明るい、楽しい市民活動に、皆が気軽に関わられるようなシステムを地道に作られてきたことがうかがえる。

翌日ようやく訪れた帯広ケア・センターでは、季節がら広大な農地はうっすらと雪に覆われ、中心活動である農作物や花の生産現場をみることはできな



かったが、片平所長の熱い思いをうかがうことができた。ケア・センターの組織構造がよくわからず、理解に苦しんでいたところ、あっさりと「そんなに複雑じゃないし、組織の仕組みを知ってもおもしろくない。」と言われてしまった。つまるところ、皆この地域に根ざしているものたち、という認識なのだろう。就労継続支援B型、就労移行支援を中心に1次産業からスタートしたこのセンターは今、6次産業化という新しい道を切り開いている。そこには、アイデアや発想の豊かさや地域住民としての土地への愛着が強く感じられた。自分たちの暮らす街にどれだけ愛着をもち、そこを豊かにする工夫をしていくか、地域ネットワークはそこから始まるのかもしれない。さて、私たちは三鷹・調布をどこまで愛せているか、自問しながらの帰途であった。

（こひつじ舎 林田）

浦河べてるの家に調査に行ってきました

事例の三番目は、社会福祉法人浦河べてるの家の訪問調査の報告をさせていただきます。

浦河町は、北海道日高支庁管内の南部に位置し北は日高山脈、南は太平洋に接した自然環境に恵まれたところです。

昆布の袋詰めや当事者研究ミーティングや SST などを行っている「ニューべてる」（左下写真）に朝訪問し、朝のミーティングから参加させていただきました。ミーティングでは、メンバー各自の気分や体調の報告や、各グループホームの前日の様子などの報告がありました。ミーティング終わりには、「迎能部」メンバーによるズンドコ節の替え歌で、私たち見学者を歓迎してくれました。その後、べてるの家の活動のオリエンテーションをメンバーがしてくれました。

月曜日に訪問しましたが、毎週月曜日の午前中には、「当事者研究ミーティング」が行われて、苦勞を抱えるメンバー同士が活発に話し合ったり、時には

メンバーだからこそできる鋭い質問を今回研究テーマをあげたメンバーに投げかけられていました。幻聴さん役を買って出るメンバーがでたり、幻聴さんに対しての対処を練習するメンバーがいたり、座って話すだけでなく、みんなでワイワイガヤガヤやっている様子がとても面白かったです。

当事者研究ミーティングを終え、昼からはべてるの家の事業所のひとつでもある「カフェぶらぶら」（次頁左写真）に移動し、向谷地生良氏とともに昼食をとりながら、今回の調査目的でもあるヒアリングを実施しました。調査の中で、向谷地氏がべてるの家を立ち上げるきっかけになったメンバーとの共同生活の話から始まり、現在の活動や今後の課題等、もの静かに語られつつも、とても熱のある内容に聞き入ってしまいました。向谷地氏のヒアリング調査も含めて、現地でミーティングやプログラムに参加してみて、当事者活動をベースに、当事者のニーズに基づき、当事者が主体となり、仲間同士支え合え

る環境が充実しつつ、べてるの家の活動が拡大していったことはべてるの活動の良さではないと感じました。

あるメンバーが向谷地氏とわたしたちの調査が終わるのを待っていてくれて、カフェ「ぶらぶら」を出る直前に声をかけてきてくれました。彼は東京に帰る前に、僕の演奏を聴いてくださいとあって、店内にあるピアノを弾きながら、歌を披露してくれました。とてもやさしいメロディーと歌声で優雅な時

間を過ごすことができました。

当日は、夕方より暴風雨になり、帰りの飛行機が30分遅延するというトラブルはあったものの、浦河に滞在中は、替え歌あり、ミーティングあり、当業者研究あり、定食あり、調査あり、演奏あり、限られた滞在時間ではありましたが、とても充実した時間を過ごすことができました。浦河べてるの家の皆様、ありがとうございました。

（巢立ち風 小林）



巢立ち会 第11回 愛のふれあいコンサート

2014年 7月11日（金） 開場：18:00 開演：18:30
会場：調布市文化会館たづくり くすのきホール

出演者

- ・オクサーナ ステパニユックさん（ソプラノ歌手）
- ・紫園 香さん（フルート奏者）

地域に愛され、11回目を迎えるコンサートです。

詳細は決まり次第、当法人のHP等でお知らせいたします。

予告！

（こひつじ舎 渡邊）

メンタルヘルスのリカバリーとWRAP

＜ジーナ・カルホーン氏 講演会から＞



昨年10月5日、WRAP（元気回復行動プラン）で有名なコーブランドセンターから、ジーナ・カルホーンさんをお招きして講演会を開催しました。ジーナさんはコーブランドセンターで現

在最も活躍されている方です。

「WRAP」とはWELLNESS（元気）、RECOVERY（回復）、ACTION（行動）、PLAN（プラン）の略です。このプランは誰かに立ててもらうのではありません。ジーナさんの言葉をお借りすると「あなたが作るあなたのためのプラン」、「生き方そのもの」です。事前にジーナさんからいただいたメッセージには次のような言葉がありました。（以下、引用）

私のストーリーには3つの鍵となるメッセージがあります。

- 1) 「希望を思い起こさせる関係性」
- 2) 「クライシスは成長の機会であり変化を促進する」
- 3) 「”何が悪いのか”から”何が強みなのか”に意識を向ける (What's Wrong toward What's Strong.)」

「再発が怖い」「再入院はしたくない」という言葉は利用者の方からよく聞かれます。私自身も利用者の

方の調子が悪くなってくると緊張します。しかし、それは決して悪いことではなく成長の機会であり変化を促進するのだとするジーナさんの言葉や態度には、勇気をいただいた気がします。また、強みを見つけるために重要なことは「相手が何と思っているのか好奇心を強く持つこと」「相手に強みを訊くこと」と話がありました。自分は日頃から「訊く」ということが十分にできているだろうかと思ひ省みる機会になりました。

ジーナさんが語るWRAPはとてもわかりやすく、講演が進むにつれて引き込まれていくようでした。場の雰囲気作りが抜群で、意見を求めた時に手が挙がると「Thank you」、意見に対しては「Beautiful!」「Cool!」など声をかけて発言者の緊張をほぐし、意見を決して否定も批判もせず受け入れるその態度に、会場の雰囲気が和むのを感じました。

質疑応答の際に「発病する前の自分が、自分にとっての良い状態である」という意見がありました。この考えに対してのジーナさんの返答は「どういう風になりたいのか思い描くことが大事です」というものでした。「自分自身を発見することから始まる」という言葉を聞き、弱みにばかり目を向けては前に進めない、強みを見つけることで成長できるのだと強く思いました。今回の講演を聞いて、物事の方の考え方の妙味を感じました。

（巣立ちホーム調布第6 佐藤）



第2回ピアスタッフの集いに参加して

2013年12月14日・15日の二日間に渡り、聖学院大学にて開催された「第2回 ピアスタッフの集い」に参加して参りました。集いでは、ピアスタッフの現状と今後についての基調講演、ピアサポーターやその雇用主を交えたシンポジウム、ピアスタッフやその支援について等の分科会が開催されていました。

この集いへの参加を通じて、私はピアサポートへの迷いとわくわく感の、二つを深めることとなりました。私は2012年の10月から巣立ち会のルポゼのメンバーとなり、紆余曲折ありつつ、2013年の9月から巣立ち風のスタッフとしての勤務を開始し、同年12月まではメンバーとスタッフの二足のわらじを履いて生活していました。2014年1月現在はメンバーとしての利用登録はされていないものの、メンバーでもなくスタッフでもないような感覚で、巣立ち会の中を漂っています。今でも「私は何者か?」という、自分の在り方への迷いは消えません。そこで、今回の集いには、「自分の在り方の迷いについて、正解が聞けたらいいなあ」という安直な期待を胸に参加しました。ですが参加してみたところ、ピアサポーターの在り方は、雇用している事業所や、各人の個性や状況に応じてあまりに千差万別だということが分かりました。ボランティアとして活動している方もいれば、私のように時短勤務で働いている方、元々はメンバーだった事業所で施設長として働いている方も…。さらに、ピアとしての専門性を活かしたいと考える人もいれば、ピアも非ピアも関係ない

と考える人もいて、結局「どうあるべき」という正解を得どころか、ますます「ピアサポートってなんなんだ?私はどんなスタンスで働けばいいのかしら?そもそも私に何が出来るのかしら…」という迷いを深めることとなりました。

今の日本において、ピアサポート活動の歴史は浅く、まさに今がピアサポート黎明期といった段階にあるのだという話を、集いでは何度も聞きました。ピアサポートの在り方、活用の仕方にいわゆる定番も正解も無い環境である以上、「活動の開拓や充実」と「ピアサポーター各人と仲間にとって適度な感触が持てる、自分の在り方の確立」、その二つが、巣立ち会のピアサポート活動には欠かせません。病気を経験するまでは社会のルールに、そして病気を経験してからも暫くの間は専門家の支援者に従って生きてきた私にとって、自分の働き方の確立と、仕事の拡充は初めての経験です。前述のような迷いはありますが、初めての経験に対する、わくわく感も感じています。初めての経験を乗り越えるには、これをお読み下さっている皆様のお力添えが欠かせません。入職したての私に馴染みの無い方も多いかと思いますので、これから皆さまと様々な形で繋がりを持たせて頂けることを楽しみにしております。

(巣立ち風 窪田)



編集後記

年月の経過は本当に早い。今年ももう後11ヶ月しかない!と思わず云ってしまう。何よりも急がねばならないのが東北大震災被災地の復興。6年後の東京五輪開催は嬉しい話題だが、その6年後に復興未だ成らずと云う話題は聞きたくない。

(小島)

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧 6-26-21
特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会
定価 50円

編集: 社会福祉法人巣立ち会
〒181-0014 東京都三鷹市野崎 2-6-42
TEL 0422-34-2761

<http://sudachikai.eco.to/>
sudachi-kaze@sudachikai.eco.to